

## 二〇二四年度 入学試験問題

法学部A方式II日程・国際文化学部A方式・キャリアデザイン学部A方式

## 二限 国 語 (60分)

## 〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

## マークシート解答方法についての注意

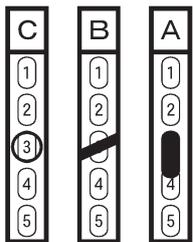
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直読読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

何も考えなければ、歩行者の目を楽しませるアートに見えるかもしれない。ときには愛らしい相貌をもつケースさえあるから厄介だ。しかし、その意図に気づくと、都市は悪意に満ちている。私見によれば、一九九〇年代後半から、オウム真理教による地下鉄サリン事件を契機に、日本では他者への不寛容とセキュリティ意識が増大し、監視カメラが普及すると平行しながら、こうした排除系のアートやベンチが出現した。ハイテク監視とローテクで物理的な装置である。

いち早く、都市社会学者のマイク・デイヴィスによる著作『要塞都市L.A』（一九九〇年）は、セキュリティが優先されるアメリカの都市状況を指摘し、「サディズム的な街並み」の誕生を論じている。そして市は富裕層のために魅力的で上品な環境を創出する一方、二、三ブロック離れたところでは、「ホームレスや貧困層にとって公共施設や空間ができるだけ「住みにくい」ところになるよう、容赦ない戦いを繰り返している」という。例えば、樽たねのように座面が膨らんだバス停の「浮浪者よけ」ベンチ、公園における頭上のスプリングカラーの定期的な作動によって長居する人を水びたしにする、凝った飾りを施した囲いでゴミ漁りをさせない、あえて公衆トイレをほとんど設置しないといった対策などだ。アメリカの過防備都市化は、日本に先行していたのである。

新聞記事を調べると、排除ベンチについては九〇年代後半から関連した記事が散見される。例えば、世界女子ソフトボール大会を控えて、静岡県の富士宮市では、浅間大社に集まるホームレスを排除することが、警察署と地域関係者のあいだで決まった（『朝日新聞』一九九八年六月二〇日）。その「作戦会議」において、ベンチを撤去する案が出されたが、県の補助金でそれら設けていた市は「ベンチを撤去するには、補助金の返還や市民の賛意が必要」とコメントしている。なるほど、一度設置したベンチを簡単に除去できないならば、ベンチを改造し、仕切りを付加する選択肢がありうるだろう。はっきりと排除の目的に触れている記事もある。

JR秋田駅の自由通路において、ベンチにロープを張って、「使用禁止」の札を下げたが、それでもホームレスが寝ていたの

で、管理する市まちづくり整備室は、ベンチに仕切りを設け、横になれないようにすることを計画したという（『読売新聞』二〇〇二年一月四日）。なお、記者の神田誠司が、公園のベンチにひじかけ状の仕切りをつけて、わざわざ三等分していることが気になり、大阪市公園緑化部に質問したところ、以下のような回答をもらっている（「無粋なベンチの仕切り」『朝日新聞』二〇一四年五月一三日）。すなわち、「ベンチを寝床がわりにするホームレスの人が増えた一九九八年ごろから、近隣住民からの要望でつけるようになったというのだ。筆者が子どもの頃、すなわち一九七〇年代はまだ上野公園に傷痕軍人がいて、<sup>しょうい</sup>家の戦争による犠牲者として見られていたのに対し、一九九〇年代からのホームレスは自己責任論が跋扈し、<sup>ばっこ</sup>迷惑な存在として排除の対象となる。

言うまでもなく、本来、ベンチは座るためにデザインされたプロダクトである。だが、通常は複数人で座ることも想定し、細長くなっていることよって、その上部で寝そべることも可能だ。これは本来、意図されていなかった用途かもしれない。だが、行き場を失ったホームレスにとっては、冷たい地面の上で寝ないですむ台として活用できる。そこで座るとして役割だけを残して、寝そべることを不可能にしたのが、仕切り付きのベンチなのだ。増えはじめた頃のベンチをよく観察すると、仕切りは明らかに後から付加されたものが多く、<sup>1</sup>行政や管理者の公共空間に対する考え方の変化が可視化されていた。すなわち、誰もが自由に使えるはずの公共空間が、特定の層に対しては厳しい態度でのぞみ、排除をいとわれないものに変容している。おそらく、通常の生活をしている人は、仕切りがついたことを深く考えなければ、その意図は意識されないだろう。言葉で「禁止」と、はっきり書いていないからだ。しかし、排除される側にとって、そのメッセージは明快である。つまり、排除ベンチは、言語を介在しない、かたちのデザインによるコミュニケーションを行う。

禁止だと命令はしないが、なんとなく無意識のうちに行動を制限する。これは環境型の権力なのだ。<sup>2</sup>アフォーダンスの概念は、環境が人間や動物に対して影響を与え、ふるまいをうながすことを意味するが、ここでは「させない」という動作の否定に用いられている。またデザインの分野において、アフォーダンスの視点が導入されると、すぐれたデザインとはその使い方を自然にアフォードするものという考え方となるだろう。例えば、ドアノブが円形になっていれば、深く考えなくても、人は

それを握ってまわすという風に。

(中略)

いずれも主に視覚の分野に関わるものだが、一般的にアートとデザインの違いは以下のように説明される。すなわち、求められる用途に応えるのがデザインであり、直接的な機能がなくても成立するのがアートだ。またデザインは問題解決型である。つまり、近隣住民の要望によって、公園にホームレスがいることが目障りだ、もしくは不安であるという課題に対し、なるほど排除ベンチは役立つ。ただし、それでホームレスがいなくなるわけではないから、社会問題の根本的な解決にはつながらない。だが、『ビッグイシュー』という路上の雑誌販売のシステムをつくることによって、ホームレスの収入源をつくり、自立を支援する試みは、広義の意味での社会デザインである。ちなみに、現代アートの分野について言えば、必ずしも絵画や彫刻による対象の描写に限定されるものではなく、むしろ問題を提起する作品が高く評価される。したがって、前述した新宿西口の地下道における活動や渋谷の246表現者会議などは、十分にアートと呼べるだろう。

筆者が、青山のビル前でドーナツのような黄色い物体を初めて見たとき、排除ベンチが次のステージに到達したと感じた。まったく既存のベンチに似ていない。なんとなく、パブリックアートのようにも見える。ただし、ほどよい高さなので、歩き疲れた人には、そこで座るといふ行為をうながさだろう。実際、数人が腰掛けていた。もともと、その物体はリング状に湾曲し、全体が丸味を帯びているために、平らな面がない。なるほど、これは座ることは可能なオブジェだが、もはや最初から寝そべるといふ行為をまったく発想させない。つまり、禁じていることも巧妙に気づかせないのだ。しかし、新宿の斜めにカットされた円筒形オブジェのように、座ることさえ拒否する排除アートも存在する。これは身体のふるまいに働きかけない造形であり、機能なき純粹なアートと呼ぶべきなのか？ もちろん、設置された意図があるから違う。ホームレスの代わりに、公共の場所を物理的に占拠することが最大の目的だ。つまり「させない」という否定形の機能はもつ。そもそも公共の空間は、様々な行為を許す自由な場なのだが、その可能性を部分的につぶすことに貢献している。とすれば、排除アートは、作者が表現を行うためのアートではなく、

X

なのだ。

実際、「排除アート」にあたる英語としては、やはり「Art」という言葉は使われておらず、「Hostile architecture(敵対的な建築)」や「Defensive urban design(防御的なアーバン・デザイン)」などが使われている。海外の文献を調べると、日本に先行し、こうした装置は一九九〇年代から調査の対象になってきているようだ。そしてホームレス排除のために突起物がある通路、寝られないベンチ、定期的に水を浴びせるスプリンクラー、アンチ・スケーターのオブジェなどの事例が挙げられている。なるほど、建築やアーバン・デザインは、権力と結びつきやすいジャンルだから、排除アートよりもふさわしいだろう。また建築の起源を考えると、対外的な敵からの防御は主要な役割のひとつだった。人を守るためのシールドである。あるいは、侵入を防ぐために、都市のまわりに構築する城壁だ。しかし、近代を迎えると、鉄道などの交通が発展し、市壁は消えていく。だが、人が流動的になった都市の内部において、セキュリティが意識されると、今度は格差<sup>3</sup>にもとづく、見えない戦争が起きている。敵は外からやってくるのではない。代わりに、まわりにいる人が犯罪をするかもしれないという恐れから、一般市民の自己防衛のための排除が求められる。ちなみに、犯罪の実数で言えば、諸外国と違い、むしろ日本の治安は良くなっているが、逆に体感治安は悪化し、不安に思う人は増えている。

犯罪学者の谷岡一郎は、人の目が多いから表の大通りでは犯罪が起きにくい、マンションは二階が最もよく狙われる、自販機がなければ、そもそも自販機荒らしは発生しないなど、環境と犯罪の関係を説明しつつ、「環境犯罪学」の考え方を紹介する(『こうすれば犯罪は防げる——環境犯罪学入門』二〇〇四年)。例えば、バス停の壁面を透明なアクリルにして丸見えにする、コンビニのレジを外部から見えやすい位置に変える、深夜はトイレを封鎖する、道にコブをつけて自動車をゆっくり走らせるなど、簡単な工夫によって、潜在的なリスクを排除するというものだ。また一九七九年にマーカス・フェルソンらが提唱したルーティン・アクティビティ・セオリーは、犯意ある行為者、ふさわしいターゲット、監視者の不在という三条件が揃うと、犯罪が起きやすいという理論であり、そうならない環境をめざしている。これらは言語によるコミュニケーションを介さず、なんとなくそうさせないという無意識下の働きかけだろう。あるいは、人のふるまいを動物的にとらえるものである。谷岡によれば、レイ・ジェフリーの著作『環境デザインによる犯罪予防(CPTED)』(一九七一年)やオスカー・ニューマンの『まもり

やすい住空間』（一九七二年）が、環境犯罪学の嚆矢こうしとなった。一九八二年に発表された有名な「割れ窓理論」も、一枚の割れた窓ガラスを放置すると、やがて全体に荒廃が広がっていくという考え方である。ただし、結局、その限界は犯罪の転移になるということも認めている。

社会学者のジョック・ヤングは、犯罪を恐れて、一九六〇年代の後半から人々が Y 型社会から排除型社会に移行しているという（『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』二〇〇七年）。かつて二〇世紀半ばのニューヨークの近代的な開発を推進したロバート・モーゼスは、貧者、黒人、ヒスパニックを排除すべく、わざわざ遠い場所に公園やプールを設けたり、橋によってアクセスを悪くするなどの都市計画を試みた。またアメリカでは、外壁で囲い、フェンスを張りめぐらせ、出入り口が制限された特定の共同住宅スペースとして、ゲートッド・コミュニティが登場している。都市計画学者のエドワード・J・ブレークリーによれば、一九六〇年代にレジジャー・ワールドのような退職者向けの住宅地が確認され、一九八〇年代にはいわゆるゲートッド・コミュニティが出現し、一九九七年の時点では三〇〇万以上の住戸からなる、およそ二万のゲートッド・コミュニティの存在を推定している（『ゲートッド・コミュニティ——米国の要塞都市』二〇〇四年）。さすがに日本では、ここまで露骨な都市デザインは難しいだろう。しかし、日常の風景にまぎれている排除のための装置は、そうした性格をもち、例えば、新しい国立競技場のまわりも実は排除ベンチだらけである。

（中略）

元アーティストの文筆家である大野左紀子は、「美術」という言葉に代わり「アート」がよく使われるようになったのは、一九八〇年代からだと言っている（『アート・ヒステリー——なんでもかんでもアートな国・ニッポン』二〇一二年）。そして日本では、この言葉が独特に使われているという。例えば、ありがちな印象として、「アートって、よくわからないですよね」。もしくは感覚的にとらえ、「アートを「謎めいたもの」として維持し続けようとする姿勢」だ。「排除アート」も、そうした文脈を踏まえている。美術館を訪れない人にとっては、最もよく目に触れる「作品」かもしれない。

だが、アート化は、ホームレスの排除という目的を隠してしまう。言葉の問題は重要である。悪質ないじめや痴漢は実質的

に「犯罪」だし、無理心中は家族に対する「殺人」だが、そう呼ばれないことで軽微なものという印象を与える。同様に「アート」という名称は、排除という意図を弱めるだろう。

(五十嵐太郎『誰のための排除アート?——不寛容と自己責任論』より。文章を一部省略した)

【注】

\* 傷痍軍人

\* 前述した

\* 新宿西口の地下道における活動

第二次世界大戦で重傷を負い、障がい者となった兵士。

この文章より前の箇所、以下の二つの活動について述べられている。

画家の武盾一郎が、新宿西口地下道のダンボールハウスで生活していたホームレスを支援するため、排除に反対する表現を行ったこと。

\* 渋谷の246表現者会議

渋谷駅横の国道二四六号高架下をアートギャラリーに変えるためにホームレスを排除しようとした動きを批判し、対抗する運動。

\* 新宿の斜めにカットされた円筒形オブジェ

新宿西口地下道のスペースに設置された一五個の小型オブジェ群。

問一 傍線部1「行政や管理者の公共空間に対する考え方の変化が可視化されていた」とあるが、具体的にはどのように可視化されたといえるか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 以前よりも近隣住民の意見を取り入れるようになり、要望に応じて、富裕層だけが自由に使うことのできるベンチを設置した。

イ 七〇年代に比べて人々が自由に過ごすことを許さなくなり、複数人で使用することがないよう、ベンチに新たな加工を施した。

ウ 九〇年代に入ってから公共性を考慮するようになり、誰もが平等に使えるようにするために、仕切りがついたベンチを改造した。

エ かつては誰でも自由に過ごせる場所を設けていたが、一部の人を排除する目的を持つようになり、ベンチの仕切りを取り外した。

オ 九〇年代には行き場のない人々に対して不寛容になり、本来の目的でのみ使用されるよう、設置済みのベンチに加工を施した。

問二 傍線部2「環境型の権力」とあるが、なぜそういえるか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 住民の要望により管理される公共空間において、人々は場に適した行動を取るよう促されているから。

イ 行政組織が形成した公共空間において、人々が好きなように過ごすことが許されていないから。

ウ 海外の影響を受けて形成された都市空間において、一部の人を強制的に排除する状況が作られているから。

エ 警察や行政が監視する都市空間において、人々が反抗や抗議をすることが認められていないから。

オ 報道の圧力によって変化した公共空間において、各自のその場にふさわしい行動が指示されているから。

問三 空欄

X

にあてはまる表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア ネガティブな機能をもつデザイン
- イ ポジティブな役割を果たすデザイン
- ウ ネガティブな用途のためのアート
- エ ポジティブな意味をもつアート
- オ パブリックな指示を出すデザイン

問四

傍線部3「格差にもとづく、見えない戦争が起きている」とあるが、実際にはどのような動きがみられるか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 新たに転居してきた人々を見下し、彼らを排除することを目的として都市環境を整備したり、建築物に加工したりする動き。
- イ 生活の安全を維持するために、学者の権力を借りて、特定の人々に気づかれないうちに都市や建築物を改造しようとする動き。
- ウ 経済的弱者やホームレスなどが罪を犯すのではないかと一方的に決めつけ、予防的な都市計画や環境作りを実施する動き。
- エ 裕福な市民が暮らしやすくするため、生活困窮者の存在を無視し、潜在的なリスクのない環境や建築物を作ろうとする動き。
- オ 身近に犯罪者がいるかもしれないという恐れを抱き、治安を悪化させないために、移民が都市に流入しないよう予防する動き。

問五 空欄

Y

にあてはまる言葉として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 自由    イ 包摂    ウ 共働    エ 従属    オ 奉仕

問六 本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 青山のビル前に置かれたオブジェは、変わった形でありながら複数人で腰掛けられるなど、誰でも好きなように使うことができる。

イ 新聞報道や近隣住民の要望に応じて、公共空間に排除ベンチやそれに類するものを設置する行為は、本来の意味での社会デザインだといえる。

ウ 日本はアメリカの都市デザインに強く影響を受けており、排除アートに加え、各地にゲーテッド・コミュニティが形成されている。

エ アートとは、何らかの機能がなくても成立するものであるが、現代アートにおいては問題提起を行う作品が高く評価されている。

オ 近年の日本は犯罪の実数が増加し、人々が不安を感じるようになったため、防犯のための排除アートが各地に設置されるようになった。

問七 筆者は、「排除アート」という言葉のどのような点を問題視しているか。つぎの形式にしたがって、三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

--

という点。

(下書き用)


40  
30  
という点。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

多死社会を迎える先進国を中心に、安楽死への関心が高まっている。日本でも安楽死を望む人々は、昨今、増加傾向にあるように思う。しかし、日本社会において、その最期が本当に相応しいのかどうかは疑問である。

私は、2016年からスイス、オランダ、ベルギー、米国、スペイン、日本の現場を訪ね、安楽死の本質について、さまざまな角度から取材を続けている。生きる望みを失った高齢者や末期がん患者、難病を患っていた日本人女性などが、実際にスイスで安楽死を遂げる瞬間を見届けてきた。

ここ最近では、スペインで銃撃事件を起こした被疑者が「死ぬ権利」を求め、裁判を受ける前に安楽死した事例を調査した。さらに、フランス映画の巨匠、ジャン＝リュック・ゴダール(享年91歳)がスイスで安楽死した後、彼の友人や看護師らを取材し、ゴダールが死期を早めた真相を探っている。

まず、私が考える「安楽死」の定義から述べておきたい。スイスでは、患者自らが致死薬入りの水を飲み干すなどの方法で自死する「自殺補助」<sup>ほうじょ</sup>が容認されている。一方、オランダ、ベルギー、スペインでは、自殺補助のほか、医師が注射に入れた劇薬を患者に直接投与し、死に至らせる「積極的安楽死」も認められている。私は、広義の意味で両者を安楽死と呼んでいる。

安楽死は、唐突に生まれた制度ではない。それを容認している国々には、「死ぬ権利」を求める人々の歴史があったことを忘れてはならない。

例えば、スイスでは、1981年に「死の自己決定権会議」が開かれ、その翌年、世界初の自殺補助団体「エグジット」<sup>A</sup>が設立された。医師が特権的に与えてきた治療の決定権を、患者のもとにキずる運動へと発展していったのだ。

スイスは、19世紀から自殺を犯罪とみなしておらず、自殺希望者に手を貸す人間も「共犯者」に当たらなかった。ただし、刑法115条では、「利己的な目的で、他人の自殺を誘導・手助けした者は罰せられる」と定めている。

自殺補助とは、

X

、利己的な目的でなければ罰せられないという解釈になる。2004年になると、スイス医師科

学アカデミー(日本の医師会に相当)が、末期がん患者への幫助をガイドラインとして認めることになった。

オランダも、安楽死法制化への道のりは長く、険しかった。きっかけは、1971年に発生した「ポストマ医師安楽死事件」だった。脳溢血のういつけつで倒れた実母に対し、娘であるポストマ医師が200ミigramのモルヒネを打ち、死に至らせてしまう。起訴された医師は、国民の同情や支持を集め、安楽死を肯定する運動に火が付いた。

73年、ポストマ医師は、チョウ役<sup>B</sup>1週間、執行猶予1年の判決が下された。この裁判での注目点は、安楽死を認めるための4要件——①不治の病に冒されていること、②耐え難い苦痛があること、③自らの生命の終焉しゅうえんを要請していること、④患者の担当医か、その医師と相談した医師が患者の生命を終焉させること——が提示されたことだ。

その年、「オランダ安楽死協会」(NVE)が設立され、「医師による自発的安楽死の実施を法的に容認」する社会運動が始まった。その後も、精神病患者や終末期でない患者に対する安楽死事件が論争を巻き起こし、93年には安楽死のガイドラインが下院で可決。2001年、「要請に基づく生命の終焉ならびに自殺幫助法」が制定され、翌年に施行された。

では、日本はどうか。同じような事件や論争が、過去に起きなかったわけではない。1991年の東海大学医学部附属病院や98年の川崎協同病院などで、臨死状態の患者に対し、医師が筋弛緩剤しかんなどを投与し、死に至らせた事件が世間を騒がせた。しかし、医師への処罰は下されたものの、社会的な運動につながることはなかった。

諸外国では、長年の議論と運動を経てきたことが窺うかがえる。日本が多死社会に向かっているとはいえ、国民的な議論やコンセンサス、または制度上の仕組みなどの基盤がないまま安楽死を認めようとする考えは、大きな過ちにつながりかねない。ここはもう少し、冷静に検討する必要があるようだ。

そもそも安楽死とは、患者だけの問題なのだろうか。私は各国で取材しながら、「残された家族がどのような思いで生き続けるのか」ということに、絶えず関心を示してきた。この出発点がおそらく、欧米と日本の違い<sup>1</sup>なのではないか。死を求める患者を取り巻く環境を知らずして、安楽死という言葉だけが独り歩きしてはならないはずだ。

かつて安楽死に付き添った人々は、数年後、どのような心境を抱えているのか。私は、彼らの「その後」取材してきた。

スイスで自殺幫助を受けた末期がん女性を看取った元夫は、元妻が安楽死したことについて、「もう悲しくはない。彼女の死はひとつの事実として刻まれている」と答えていた。過去を引きずることなく、新たな人生を送っているようだった。

また、安楽死当日にパーティーを開いたオランダ人男性の妻も、理想の最期をかなえた夫の決断について、「安楽死は正しいと思う。後悔はしていない」と胸の内を明かした。パーティーに参加した友人たちからも、「美しい最期だった」との感想を耳にしたという。

欧米は、個を尊重する社会で、宗教的にも「死んだら終わり」という考えに基づく。しかし、それは同時に、個人の選択する死が憚られることも少ないことを意味する。欧米で「死ぬ権利」が盛んに叫ばれ、支持される理由は、「個の確立」と無縁ではなさそうだ。

これに対し、日本はどうだろうか。「死んだら終わり」と割り切れるのか。欧米と同様の考えを持つ人もいるかもしれない。だが、日本人は一般的に「死んでも生き続ける」という宗教的な観念だけでなく、そうした期待を抱く人が多いのではないだろうか。

そこに、死の自己決定の難しさが隠れている。このような両文化圏の違いを認識せず、「多死社会だから安楽死」と結びつけることは、日本の文化や価値観を根底から揺るがすことになってしまうだろう。

他にも、欧米と異なる点で、私が特に危惧することがある。それは、心の痛みや孤独を抱え、「周りに迷惑をかけたくない」という気遣いから安楽死を選ぼうとする空気が、日本にはあることだ。

安楽死を遂行する上でもっとも重要なのが、患者本人が「明確に意思が表明できる」ことであり、他人の気持をオモンパカつての決断ではない。私がひたすら、日本の安楽死法制化に前向きでない理由は、そうした点にもあるのだ。

多死社会を前に、日本社会で考えるべき重要なことは、安楽死という選択肢を持たなくても良い社会の構築ではないか。

忘れられない取材がある。私が東京で出会った、末期がんに苦しんでいた男性(享年43歳)は、安楽死を決意し、スイス渡航の準備を進めていた。彼は、それが理想の死に方だと信じていた。しかし、<sup>2</sup>現実<sup>2</sup>は違つたと、私は思っている。

彼に安楽死の願望を抱かせた最大の理由は、「家族と疎遠」だったことだ。だが、後に家族との関係が修復に向かうと、その男性は日本にとどまった。最期は、妹に向かって「ありがとう」と告げ、息を引き取った。

その時、私は、あることに気がついた。日本人が安楽死を選ぶ動機は、肉体的苦痛というよりも、精神的苦痛を背負っているからではないのか、と。もし肉体的苦痛に耐えられないならば、日本には「緩和的鎮静」で痛みを和らげる技術がある。もし延命治療に苦しむならば、その中止や手控えが容認されている。日本では、それを「尊厳死」と呼び、安楽死とは異なるものとして認識されている。

最後に、誤解を避けるために述べておくが、私は、安楽死という死に方に反対しているわけではない。

安楽死は「死ぬ権利」に優る権利がないとの考えに行き着いた個人主義社会の欧米だからこそ、成り立つ制度であり、私はそれを否定しない。だが、日本のように Y では、同じ制度を取り入れても、彼らのような認識に至ることは難しいということだ。

現状の日本では、安楽死が違法である。欧米諸国が長年の議論から導き出した安楽死への法的、または医学的プロセスが、日本には用意されていない。だが、この制度的な面をクリアしたとしても、死に対する社会的な価値観が異なるため、安楽死は日本人に不向きであるように思える。

患者のみならず、医師や家族も納得できる最期に安楽死を求めらるならば、日本はもうしばらくの年月を必要とするだろう。「多死社会だから安楽死」という短絡的な議論で、欧米の制度を真似ることだけはしないほうがいい。今、重要なことは、「死」の議論をじっくりと深め、日本独自の死生観を探究することだ。多死社会を前にしたヒントは、そこから自ずと見えてくるかもしれない。

(宮下洋一「多死社会だから安楽死」が日本人に不向きな理由「より」)

問一 二重傍線部A「キする」B「チョウ役」C「オモンパカって」のカタカナ部分の漢字表記について、傍線部に同じ漢字があてはまるものをつぎの中からそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A キする

ア 夕方にキ宅する      イ キ日を守る      ウ キ憶に残る      エ キ少価値がある      オ キ礎を固める

B チョウ役

ア 一チヨウ一短      イ 日程をチヨウ整する      ウ 時代思チヨウ      エ チヨウ発的な言葉      オ 勸善チヨウ悪

C オモンパカって

ア ソウ像上の生き物      イ 沈シ黙考      ウ 遠リヨがちに言う      エ 一ネン発起      オ 帰納的スイ論

問二 空欄 X に入る表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 姑息な見方をすれば      イ 斜に構えるならば      ウ 率直に言えば      エ 奇をてらうならば      オ 裏を返せば

問三 傍線部1「欧米と日本の違い」とあるが、患者を取り巻く環境上、日本と異なる欧米の特徴に関する説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 宗教上、自殺は禁じられているが、肉体的苦痛に耐えられない場合、患者は社会的支援のもと、安楽死を選択できる。  
イ 患者が安楽死を選んでも、家族はそれを自己決定による理想的な最期と受け止めるため、けっして悲しむことはない。  
ウ 利他的行為と認定されれば自殺幫助は犯罪とならないため、苦痛からの解放を望んだ患者は皆、安楽死が可能である。  
エ 死ぬことも個人の権利とされているため、患者は安楽死の意思を明確に表明することができ、家族もそれを尊重する。  
オ 患者の家族が安楽死への忌避感を持つていたため、議論は長期に及んだが、医師の要請により安楽死が法制化された。

問四 傍線部2「現実には違ったと、私は思っている」とあるが、末期がんで苦しんでいた男性の死について筆者はどのように考えているか。つぎの形式にしたがって、三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

末期がんに苦しんでいた男性は

--

と筆者は考えている。

(下書き用)

末期がんに苦しんでいた男性は


と筆者は考えている。

問五 空欄 Y に入る表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 多死社会が急速に近づいてきている状態
- イ 個人よりも集団における調和を重んじる社会
- ウ 延命治療より「緩和的鎮静」が強く望まれる環境
- エ 家族の希望による「尊厳死」という選択肢がある国家
- オ 「個の確立」が不十分で患者と家族の意向が尊重されない状況

問六 本文の内容に合致する説明を、つぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア スイスでは、積極的安楽死が19世紀には認められ、世界に先んじて「死の自己決定権会議」を開いて「死ぬ権利」を保障しており、病に苦しむ患者を尊重した制度が急速に整えられた。
- イ オランダでは安楽死法制化に時間を費やし、安楽死の定義やガイドラインの制定が進められたが、個別のケースを取材すると、必ずしも国民のコンセンサスが得られたとはいえない状況にある。
- ウ 安楽死が認められた国で最期を迎えるため渡航する日本人もいるが、日本では、安楽死制度が確立しても定着しにくいと考えられ、それよりも日本人の精神面を考慮した対策を講じることが重要である。
- エ 安楽死を合法化するためには、個人主義社会の成熟と宗教的な観念など文化的側面とのすりあわせが重要であるが、そうした点で日本は欧米に遅れをとっており、患者のためにも議論を進めていった方がよい。
- オ 日本では、患者の肉体的苦痛を思いやる措置や「尊厳死」がすでに認められているため、欧米にならって、「安楽死」を制度化するのは時期尚早であり、その法制化には既存の法律に抵触しないよう、さらに慎重な議論が求められる。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

鎌倉武士、入道して高野の蓮花谷<sup>れんげだに</sup>に行ふありけり。この者が寝る所にて、夜な夜な女と物語をしける音のしければ、具したりける弟子ども、おほかた心得がたくて、便宜<sup>べんぎ</sup>のありけるに、ある弟子、この入道に尋ねたりければ、「さる事あり。我が女の鎌倉にありしが、夜な夜なこれへ来るなり。それに何事も言ひ合はせ、又、ふるさとの事のおぼつかなさも語り、世間の事もはからひなどしてあるなり」と言ひければ、弟子、いふはかりなくふしぎにおほえて、ふしぎのあまりに、空阿弥陀仏<sup>くうあみだぶつ</sup>にありのままに申しければ、空阿弥陀仏うち案じて、「さる事も多くあり。この女のいたく恋ひしく思ふによりて、魂<sup>B</sup>などの通ふにこそ。この定<sup>ちやう</sup>ならば、臨終<sup>1</sup>の妨げにもなりならず。急ぎ祈るべきぞ」とて祈られけり。

ある時に、「念仏にて祈りてみる」とて、蓮花谷の聖<sup>ひじり</sup>三四十人ばかりめぐり居て、この入道をなかに据ゑて、念仏を責め伏せて申したるに、入道も同じく申しけるが、空阿弥陀仏の秘藏<sup>ひさう</sup>の本尊の、帳<sup>\*</sup>に入りたるがおはしましたる、<sup>2</sup>そのかたをつくづくとまもりて、おそろしげに思ひて、わなわなとふるひければ、空阿弥陀仏、よりて、「などおそろしげには思ひたるぞ」と問へば、「その御本尊の御前に、かの女房がまうで来て、我をよにうらめしげに見て候ふが、などやらん、あまりにおそろしく」と申しければ、その時、空阿弥陀仏、「門々<sup>\*</sup>不同八万四、為滅無明果業因、利剣<sup>りけん</sup>即是弥陀号、一声称念罪皆除」と、たかく誦せられたりければ、この女の顔の、中より二つにわかれて、散るやうに見えて失せにけり。これをば人は見ず、ただ入道ばかり見て、いとどおそろしくて、つんつんとかみへ躍りたるが、その後はもとの心になりて行<sup>3</sup>ひけり。

念仏の力のたふとき事、いとど人々たふとびあひけり。

X 女は、つやつやさる事なくて、もとのやうに鎌倉にありけりとぞ聞こえし。天魔<sup>\*</sup>のしわざか、又、女の恋ひしと思ひけるがゆゑにか、いとふしぎなり。

(『今物語』より)

【注】

\*蓮花谷

紀伊国高野山の地名。念仏聖が多く集まっていた。

\*空阿弥陀仏

藤原通憲(信西)の子、明遍(一一四二—一二三四)。東大寺で三論宗を学んだ後、真言密教や

浄土教を修め、高野山に移住。念仏聖の中心となった。

\*秘蔵の本尊

空阿弥陀仏が特に信仰する仏像。

\*帳

人目をさえぎる扉や布。

\*門々不同八万四……

浄土教の僧善導(六一三—六八一)著『般舟讚』の文句。

\*天魔

仏道修行を妨げる魔王。

問一 傍線部A「ふるさとの事のおぼつかなさも語り、世間の事もはからひなどしてあるなり」の意味として最も適切なものを

つぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 故郷が荒れてしまった状況を嘆き、世の中の動きにもいろいろと気を揉んでいるのだ。

イ 故郷の忘れがたさを語り、世間の取沙汰をいまだに気にして思いをめぐらしているのだ。

ウ 故郷の心配なことについて話し、暮らし向きのことも取り計らっているのだ。

エ 故郷の懐かしさを吐露し、男女の仲についてもあれこればかりごとをしているのだ。

オ 故郷がみすばらしくなっていく様子を語り合い、人々の噂話に耳を傾けているのだ。

問二 傍線部B「通ふにこそ」の後にはある言葉が省略されている。その言葉として最も適切なものをつぎの中から選び、解答

欄の記号をマークせよ。

ア あらざれ    イ あらましか    ウ あるまじけれ    エ ありたけれ    オ あらめ

問三 二重傍線部1「なりなんぞ」の文法的説明として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 推定の助動詞「なり」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「むず」の終止形
- イ 推定の助動詞「なり」の連用形＋強意の係助詞「なむ」＋打消の助動詞「ず」の終止形
- ウ 動詞「なる」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「むず」の終止形
- エ 動詞「なる」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「む」の連用形＋打消の助動詞「ず」の終止形
- オ 動詞「なる」の連用形＋強意の係助詞「なむ」＋打消の助動詞「ず」の終止形

問四 二重傍線部2「そ」は何を指すか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 蓮花谷の聖
- イ 入道
- ウ 空阿弥陀仏
- エ 本尊
- オ 女

問五 二重傍線部3「行ひけり」の主体として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 入道
- イ 具したりける弟子ども
- ウ 女
- エ 蓮花谷の聖三四十人ばかり
- オ 空阿弥陀仏

問六 空欄 X にはどのような語が入るか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 化生の
- イ 本心の
- ウ 化身の
- エ 本体の
- オ 化人の

問七 本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 入道が夜な夜な女のもとに通っていたため、弟子たちはその行動に不審を抱いた。

イ 入道は、通っている女が実は自分の妻で、毎夜下山して密会していると答えた。

ウ 空阿弥陀仏は、入道の心にある女への深い恋慕が、そもそもの原因であると語った。

エ 蓮花谷の聖たちは、入道をこらしめるため、一心に念仏を唱えて責め立てた。

オ 女の顔が真つ二つに割れて消え去る様は、聖たちにも空阿弥陀仏にも見えなかった。

問八 『今物語』は鎌倉時代の説話集であるが、つぎの中から説話集ではないものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 山家集      イ 古今著聞集      ウ 十訓抄      エ 今昔物語集      オ 発心集